
奴隸の少女と、一匹の野良猫

K A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隸の少女と、一匹の野良猫

【Zコード】

Z2435Y

【作者名】

KAZ

【あらすじ】

古き時代の名前もない小さな一国。それでもこの国には確立された王権と身分制度が備わっていた。

身分制度ははつきり三つに分かれしており、王族・平民・奴隸という種類だった。奴隸の身分の者は王族に一生奉仕する家来として働き、平民は王族を崇拜しながらも城下町で比較的自由な生活を過いでいた。

今回語られるのは、とある奴隸の少女と、一匹の野良猫の話である。

古き時代の名前もない小さな一国。それでもこの国には確立された王権と身分制度が備わっていた。

身分制度ははつきり三つに分かれており、王族・平民・奴隸という種類だった。奴隸の身分の者は王族に一生奉仕する家来として働き、平民は王族を崇拜しながらも城下町で比較的自由な生活を過いでいた。

今回語られるのは、とある奴隸の少女と、一匹の野良猫の話である。

* * *

今まで無駄にしぶとく生きてきたが、ついに最後か。

私は野良猫。平民達の住む城下町で、食べ物を盗んで暮らしていた。危険な目に何度も遭ってきた。特にあの恰幅の良いパン屋の店主からの容赦ない暴力は体にこたえるものがあった。しかしあの店主に本気で蹴られても死なない私はなかなかに丈夫な体をしていると思う。

しかし、対抗できるのは人間の肉体だけであった。さすがに、私がいつも逃げ込む細い道に糸が引いてあり、その糸に足を引っ掛けると上からボウガンの矢が飛んで来るなどという凝った罠をしかけられては、太刀打ちできない。

そして私の背中に見事矢が刺さってしまい、私はようよとしながら細い道を進んだ。

道の先には、王家から逃亡した奴隸が隠れ住む街があつた。私はその街でいつも収穫物を食べていた。奴隸達なら、汚い野良猫が居座

つていても何も気にしない。しかし今はさすがに嫌がるだろう。街の隅で力尽き倒れた私はいずれ死ぬ。生きている猫ならまだしも、死骸になってしまったらただの邪魔なゴミでしかない。

いいさ、野良猫の私がきちんとした埋葬をされるなんてはたから望んでいない。私が死んだら「ゴミと一緒に捨ててくれ。奴隸達にひとつては余計な手間が増えるだろうが、私には関係のないことだ。

意識が遠のいていく最中、一人の少女が私の前で立ち止まつた。そして私に近づき、今にも泣きそうな目で私の姿を見つめている。

なんだ？この人間は。

「おい、ミーラー！何をしている、早く俺たちに食料を分けてくれ」「今回もうまく王家から食料を盗んできたのだろ？」

先に言つておくが、私は人間の言葉が分からぬ。当たり前だ、猫なのだから。奴隸達が目の前の少女に遠くから声をかけているが、内容はさっぱりわからないし、興味もない。

「待つてください、ここに傷ついた猫が…」

少女は先程声をかけてきた奴隸達の方を振り返り、おどおどした口調で言った。

「猫？そんなものにかまけている暇があるものか！」

「そうだ、我々人間の命の方が明らかに価値のあるものじゃないか！」

少女は少し眉間にしわを寄せると、再び私の方を向き、おもむろに私の背に刺さつた矢を抜いた。

私は痛みに悲鳴を上げた。

「いめんね、もつ少しの我慢だから」

少女は鞄から白い綺麗なハンカチを取り出し、それを八重歯に引っ掛け、ためらいなく引き裂いた。

そういえば、こんな奴隸街にいるといつに、比較的清潔な格好をしている。

少女は私を抱き上げ、私の胴体に細く引き裂いたハンカチを巻いてきつめに縛つた。

「これで止血は出来たから。少し待つていて」

少女は先程の奴隸達に、旨そうなパンや野菜を渡すと、再び私の元に来て、私を抱き上げて歩き出した。

私は何をされるのかと不安で、いますぐこの腕の中で暴れて逃げ出したかったが、怪我のせいで体の自由が一切きかなかつた。

私はそのうち、人間の体温による暖かさによる眠気に襲われ、気付かぬうちに寝てしまっていた。

* * *

「ミーラー！ 庭の手入れは終わつたの！？」

かん高い怒鳴り声に驚いて目を覚ます。

私が今いる場所を確認する。現在私は見たこともない白い花に囲まれている。私の体は全身白い毛でおおわれているので（だいぶ汚れが付いているが）ここにいると自分の存在がかき消せるような感覚がする。

「す、すみません、まだ途中です」

「本当に仕事が遅いんだから！私の庭は、いつも完璧な美しさでなければいけないの。そのためにあなたを庭師に任命したのだから」

声のする方を見ると、先程の少女と、それよりも少し年上の、『』でござしたドレスに身を包んだ女が立っていた。

「すぐに作業を再開します、王女様」

そう言って深々と頭を下げた少女を見て、ドレスの女は満足したよう遠ざかって行った。

溜息をついた少女は、私の方に近づいてきて、私と田代が合ひつと、にっこり笑った。

「目が覚めたのね。王女様が近付いてきたから、やむを得ず花の中に隠したけど、見つかなくて本当によかった」

そして彼女は再び私を抱き上げる。辺りを見回すと、そこには見たこともない美しい草花が広がる大きな庭だった。

その中で人が通れる道を設けており、彼女はその上を進むと、小さな小屋の中に入つて行つた。

「さつきの残りがあるけど、食べるかしら」

小屋の隅に置かれた私の前に、パンが置かれた。匂いを嗅いでみたが毒はなさそうだ。

私は一口食べると、あまりの美味しさに、怪我の痛みも忘れてがつてしまつた。

「食欲はあるのね！よかつた。怪我が治るまで、私が世話をしてあ

げるからね?」

少女はしばらく嬉しそうに私の食事風景を眺めていたが、そのうち名残惜しそうに小屋の外に出た。

パンを食べ終わつた私は再びまどろみ始めた。しかし、はつと気がつく。ここは一体どこなのか。そして私はこの小屋の中から脱出できるのだろうか。あの少女は私をここに監禁して何かするつもりかもしれない。

私は怖くなつた。人間の手に落ちることは死ぬより怖いことだつた。私は恐怖に震えながら、不自由な体が動くようになるのをひたすら願つていた。

* * *

恐怖と不安を抱いたまま夜になつた。体は一向に動かない。すると、突然小屋の扉が開いて、あの少女が入ってきた。

「はい。夜ご飯よ」

差し出されたのはさつきとは違つ種類のパンだつた。
今度こそ毒が入つてゐると思ったが、香ばしい香りについつい引き寄せられ、そのパンをかじつた。

これがまた美味であり、またもや私はがつついた。それを嬉しそうに見つめる少女。

そんなことを、何度も繰り返した。

決まった時間になると少女はパンを持ってきて、私は遠慮なくそれを食べる。そして私は覚えた。ここにいれば、苦労することなく食事にありつける。そしてこの少女は食べ物を持つてくる人間だ。彼女についていれば、私は何不自由ない生活ができるのだと。

* * *

私の体はすっかり良くなつた。

もう自由に動けるし、小屋の中から出ることもたやすい。

しかし、この小屋にいれば少女がパンを持ってきてくれることを知っていたので、出て行こうなんて一切思わなかつた。

腹時計が夕飯の時間を知らせる頃、私は、今日はどんなパンだろうかと期待しながら少女を待つていた。しかし、一向に少女は現れない。

お腹がすいてイライラしていると、外から人間たちの争うような声が聞こえてきた。

「ミーラ、この裏切り者め！」

それはじばらく前に聞いたことのあるかん高い声。あのドレスの女だと思いだした。

「もう二度としないと約束します！お許しを……！」

次に聞こえてきたのは少女の声。私は餌をねだるために、小屋の扉を開けよつとした。

しかし、猫の私にはノブを掴む手が無かつた。

四苦八苦していふうちに、ドレスの女と少女の声は聞こえなくな

つた。

さて、どうしたものかと考えて、ひるひる、夜はどんどん更けて行つた。

今まで食事抜きなど何度も経験してきたのに、定期的に食べられるようになつた今、酷くお腹が空いたと感じてしまった。きつと明日の朝になれば、また少女は来てくれるだろつ。そう信じて、私は眠りに就いた。

* * *

翌朝、眩しい光が小屋に差し込み、私は目を覚ました。

「今日からよろしくね、新しい庭師さん

「はい。それにしても散らかつた小屋だ……」

ドレスの女の声がしたあと、青年がした。少女の姿はなかつた。私は少女に会つてパンを貰わなければならぬ。開け放たれた小屋の扉に向かつて猛ダッシュした。

ドレスの女と青年が驚いて身を固めるのを横目に、私は少女を探した。

庭から出ると、そこには大きな城があつた。

少女はこの中か？私は何とかして城の中に入らうとぐるぐる周囲を回り、排水溝の穴を見つけた。

おそらく、私がこの城の中に入るには、ここしか道はないと直感がした。私は体の柔らかさを生かして、排水溝の中に入つて行つた。

* * *

排水溝から入って出た場所は、コンクリートで囲まれた暗い廊下だった。

キヨロキヨロと辺りを見回していると、腹時計がぐうと鳴った。昨夜と今朝、たつた一回の食事を逃がしただけで、この簡単にへばってしまうほど体力が落ちてしまっていた。

当てもなく廊下を進んでいると、小さくすすり泣く声が聞こえた。それは、間違えようもない、私にパンを恵んでくれる少女のものだつた。

その声のする方へふらふらと歩いて行くと、牢屋に辿り着いた。少女は牢屋の中で涙をぽろぽろ落としていた。

「こやあ

私は少女に話しかけた。
もちろん、「食事はまだか」という意味だったのだが、少女は私に気付くと檻に手をかけて私に言った。

「猫ちゃん、助けに来てくれたの！？お願い、隣の部屋から牢屋の鍵を取ってきて。私、まだ死にたくないよ。……」

必死に何かを言っている少女。しかし私には理解できない。
ただ一つわかつたのは、この少女はもう私にパンを恵んでくれないということだ。

私は諦めた。せっかく探しに来たのに、この少女はもう私にとって用無しだ。

私はもと来た道を戻つていった。

* * *

気持ち悪い。
吐きそうだ。

私は、自分の体の異常に危機を感じていた。城から出る途中、お腹がすいて拾い食いをしたのだが、どうやら体に入れてはいけないものだつたらしい。

その場に倒れてもがき苦しんだが、私はふと、牢屋の方に戻ろうという気になつた。

あの時と同じように、少女が私を助けてくれるかもしれない……希望が薄いとは思つたが、私は足を引きずるようにして少女の元へ向かつた。

少女は私の姿を見ると、心配そうに瞳を潤ませた。

「どうしたの？ 具合が悪そうよ？」

私は檻の近く、ギリギリまで行くと、ついに我慢できなくなつて、嘔吐した。

嘔吐物の中に、私が誤つて飲み込んだ「もの」が混ざつていた。それは……

「これ、牢屋の鍵…… まさか、本当に持つてきてくれるなんて」

少女は大粒の涙を流し、私の嘔吐物の中にちゅうちゅなく指を突つ込み、その「もの」を拾い上げた。

私がぐつたりと倒れこみ目を瞑つていると、力チャリ、と鍵の開

く音がした。

「猫ちゃん、ありがとう」

少女は私を抱き上げると、頬をすりよせてきた。

「ねえ、猫ちゃん。私ね、お城の食材を盗んで奴隸街の人たちにあげてることが、ばれちゃったの。もうお城の庭師としては働けない。奴隸街の人たちも、食材を持つてこない私なんて用はないの。私、どこにもいけないのよ」

……私は、彼女の頬をつたう涙をペロッと舐めた。
ちょっと喉が渇いていたからだ。

「慰めてくれるのね。私には、もうあなたしかいないわ。猫ちゃん、
お願い。私と一緒に来てくれる？」

「にゃあ」

私が鳴いたのは、少女の言葉に対する答えではない。腹が減った
からなにかよ」せ、そういう意味だ。

やがて私と少女は、城から逃亡し、当てのない旅に出る。

私が少女と一緒に旅をする理由？

そんなもの、少女からパンを恵んでもらつたために決まっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2435y/>

奴隸の少女と、一匹の野良猫

2011年11月5日14時05分発行